C—83

妊産婦の体型について　（第4報）

広島女学院大短大　藤田光子　○和田みどり　広島文化女子短大　谷山和美

目的　妊産婦の衣服寸法設定の基礎資料を得ることを目的として，昭和48年10月～51年4月の間に，妊産婦30例の月別追跡測定を行ない，第3報として報告した。第4報は，その資料をもとにして対身長示数値，胸・胴・腹・腰部の横径に対する矢状径の比率，月数による姿勢の変化などについて検討したので報告する。

方法　第3報で報告したとおりである。

結果　(1) 対身長示数値で4～10ヵ月間に大差ない項目は，全後丈(4～10ヵ月 88~88)，後胴高(61~62)，腑高(58～57)で，その他は月間にかなりの差がみられ，特に著しいのは股上前後長(47～59)，胴囲(45～57)，胴部矢状径(12～18)，腹部矢状径(14～19)，腹角（12～29），体重(32～39)である。　(2) 身長の低い者の股上前後長，周径項目，胴・腹部矢状径，腹角，体重の対身長示数値は，各月とも身長の高い者より2～6大である。したがって，妊婦の躯幹部は身長の高い者より低い者がより大にみえる。　(3) 胸・胴・腹・腰部の横径に対する矢状径の比率は，月が進むにつれて大となる。この傾向は胴・腹部が著しく，4ヵ月時の胴部矢状径は横径の約80%，腹部は73%であるが，10ヵ月時は胴部104%，腹部96%となる。なお，矢状径が横径を上まわる者が胴部は70%，腹部は23%である。(4) 男・女児出産者別に横径に対する矢状径の比率と腹角の増加率をみると，男児出産者の方が各月とも大で，特に腹角の増加率は大である。　(5) 妊婦の腹部は漸次大となり，前方に突出するので，身体の重心が前に移る。妊婦は平衡を保つために上体を後方にそらし，いわゆる反身体型となるが，産後は常態時の姿勢にもどる。